

日本放射線安全管理学会 第16回学術大会の報告

共通機器部門 放射線管理技術班

宗岡 亜依

1. はじめに（目的等）

本大会は放射線分野に関係する研究者・技術者・実務家等が学術活動を行うことで放射線安全管理の向上を図るためのものである。最新の情報を収集することとポスター発表を行うことを目的として本学会に参加した。

2. 期間・場所

期間：平成29年6月28日～6月30日（3日間）

場所：ホルトホール（大分県大分市）

3. 参加者等

参加人数：大学・研究所・企業等で放射線研究や管理に従事する者 400名弱

4. 研修内容

合同大会シンポジウム5題、教育セッション5題、保健物理学会企画セッション6題、

放射線安全管理学会企画セッション2題、一般演題99題、ポスター発表97題、ランチョンセミナ

ー2題、総会等（各会場で開催されるものの中から選択して参加した。）

5. まとめと感想

平成 29 年度の日本放射線安全管理学会第 16 回学術大会は日本保健物理学会と共にはじめて合同で開催された。多種多様な話を聞くことができたのだがその中でも法改正と水晶体の等価線量限度に関する内容が印象的だった。法令について現行の「放射性同位元素等による放射線障害防止に関する法律」が公布後 3 年以内に「放射性同位元素等の規制に関する法律」に改正されるのに際してセキュリティの概念や危険時の措置の対応に関する検討が行われている旨の説明があった。現在、1 年間につき 150mSv である眼の水晶体等価線量限度については ICRP の声明や IAEA の適用等を受けて（5 年間の年間平均線量 20mSv、年最大 50mSv の）審議が行われていることの報告があった。

本大会で私は学内における RI 施設の安全性を向上させるための取り組みについて東広島キャンパスの事例をもとに発表を行ったのだがその際に実務に携わる人達と意見を交換できたのが良かった。近年、原子力規制庁では安全文化の醸成が議題に取り上げられることが多い。最新の情報を収集し安全な RI 施設の管理を実施することでユーザーが安心して利用できる環境を整えたいと考えている。大会期間中に他大学の人達と交流ができた点においても非常に有意義な時間を過ごすことができたと感じている。